

# 台湾女性 (Ipin Chen) のライフストーリーにみる社会運動に参加する市民の動き

玉 城 直 美

## 要 旨

本稿の目的は、台湾出身女性、Ipin Chen (陳伊品) イーピンチェンさんの語りを通して、台湾から日本 (沖縄) に留学し、彼女の社会運動に関わってきた経験や価値観に焦点を当てていく。その上で、現在の台湾における社会運動のなかで市民がどのように関わり、導かれてきたのかを考察していく。

1980年代に民主化の動きが起こる台湾の中で成長してきた彼女は、2001年に台湾から沖縄の大学に交換留学生として滞在した経験を持つ。留学を終え、台湾に帰国後、日本語話者として日本に関わる台湾企業、日本と台湾を行き来する仕事に就きながら、彼女のライフワークとして社会の開発問題に関わる活動を行っている。

留学後の彼女の生き方、特に東アジアで起こっている社会課題を自分ごととして考え、問題の現場へ仲間と共に訪問しては継続的に交流を行っている。東アジアの運動家とも緩やかにつながる彼女の経験やストーリーを通して、台湾の民主主義の運動に主体的に参加している様子をまとめた。

キーワード：台湾女性、留学、若者と社会運動、ライフストーリー、台湾と沖縄

## 1. はじめに

本稿は、「島嶼地域における女性の主体的移動と近現代社会に与えた普遍的インパクトに関する研究」として、学問領域を横断的に研究者が集い研究 (2018～2020年) を行ってきた報告の一つである。

本研究<sup>1</sup>における、「主体的」とは、人が過ごす時間軸において、様々な選択肢のなかの一つとして自らが選んだ生き方であると筆者は考える。「移動」は、人間が動き、現在居る場所から、別の場所へ移り住むこと、「移住＝移民とは単純な概念であるように見える。人々はある土地や国境外の土地や国へと移住し、そこに長く滞在することで移住者・移民とみなされるようになる。しかし、この単純さの背後には、非常に多くのヴァリエーションと複雑さが存在している」[Russell2010]。人の移動は多くのヴァリエーションがあり、その中で留学を通じて国境を超えるものもある。「教育を求めて国境を超える人々の数は国際移住者総数の2%に過ぎないが、その重要性は増している」[Russell2010]。他国の高等教育機関で学び合い、本やインターネットの世界ではないリアリティーを経験しながら、その国の言語、文化や価値観に遭遇する。またそこで出会う、教員、留学先の学生はもとより、海外からの留学生同士の交流もまた豊かな時間であるといえよう。

台湾社会の変化が国際的なニュースになることが幾度もあるなか、筆者にとって興味深かったものは、2018年の11月24日、統一地方選挙の投開票日である。当時、筆者も台湾を訪問し、前日までの選挙キャンペー

ンと若者たちの運動の様子を見学し、開票結果を見守った。政治的信条が似通う市井の若者たちがSNSを通じて知り合った同士のオフ会場で、プロジェクターで壁一面に投影される選挙速報が、スポーツの国際的な試合のパブリック・ビューイング観戦を想起させる風景であった。応援している候補者の当確が出ては歓声があがり、相手陣営の当確が伝えられて残念な声があがっていた。当時の総統は蔡英文<sup>ii</sup>であり、同国初の女性の総統である。筆者がインタビューを行ってきた若者たちからも小英 (ニックネーム・英ちゃんの意味) と親しまれていたが、蔡英文の所属する与党の民主進歩党は大敗の結果により、蔡英文党主席辞任の速報が流れた。涙ぐむもの、悔しい声を中国語で叫ぶものがいた。集った若者らと語り合うと、日本語や英語を自由に話し、留学やワーキングホリデー等を活動し海外に住んだ経験のあるものも少なくない。日本や台湾で見る若者らと様子は変わらないのにも関わらず、社会問題や選挙結果に関心を示し深く語り、デモを開催し、社会に変化を及ぼすことが出来るのか、その疑問にずっと筆者は向き合っている。

沖縄と台湾は共に東アジアにおける島嶼圏であり、人的な交流も盛んである。日本の影響を持つ歴史、文化、言語や原住民族の権利復興、政治的な立ち位置や心情等、重なりあう課題もあると筆者は考えている。また両地域に暮らす若者たちの様子も筆者の感覚ではあるが、地域を愛し、地域をどうにかしたいと願う若者の動き等、類似する点が多い。共通する社会課題や

人の様子があるなか、留学経験や海外での滞在を経験した若者らの帰国後、その国の社会運動に及ぼす影響があるのではないかという筆者の仮設がある。

台湾は1987年、戒厳令<sup>iii</sup>が解除されるまで38年間、言論や情報や教育の統制、台湾語の使用禁止等、生活の様々な面での規制が敷かれていた。それから30数年の間に台湾には急速な民主化が加速しており、その国家の動きと若者たちの社会運動が、国内外の注目や関心をエネルギーに変えながら民主化を加速する一つのエンジンとなって見える。

2011年の東日本大震災の際には、台湾は日本にいち早く支援の表明を行っており、2014年頃より続く香港民主化運動に対しては、政府や市民レベルでの応援姿勢を示し、2019年アジア初の同性婚を合法化し、原住民族の権利支援や脱原発の動きも活発化している。国民の9割が中国大陸から移り住んできた移民であり、戒厳令後には、人の移動が自由になり、留学、労働（ワーキングホリデー含む）者を海外に排出し、また東南アジア諸国の特に女性を中心とした労働者<sup>iv</sup>を受け入れる移民受け入れ大国である。国土面積が日本の九州より少し大きな国土面積を持ち、2300万人の小国である台湾の中で、筆者は人々の移動（留学をはじめとした海外での滞在経験）が社会運動に与える影響に注目している。本稿では、沖縄の大学に留学した経験を持ち、社会活動に関わる台湾女性Ipinさんのライフストーリーから考察を行う。

## 2. 研究目的

台湾<sup>v</sup>出身女性、Ipin Chen（陳伊品）イーピンチェンさんの語りを通して、自ら望んで台湾から日本（沖縄）に留学し、その後も海外と台湾を行き来する中で彼女の社会運動に関わってきた経験や価値観について考察することである。なお、本稿の38頁にライフストーリーインタビューをもとに、彼女の生活史（ライフストーリー）および台湾の社会的な動きを付録としてまとめているので、ご参照願いたい。

## 3. 研究方法

### 3-1. 調査協力者

被調査者は台湾・台中に在住する女性、Ipin Chen・陳伊品さん（以下、Ipinさんと表記）である。1979年台湾の台中生まれで、2020年現在、41歳である。台中の東

海大学の日本語学科で学び、2001年、大学4年生の時に沖縄国際大学に約1年間、交換留学生としての経験を持っている。2002年に台湾へ帰国した後に日本語を活かし、台湾企業に務めている。日本企業と台湾、中国のメーカーとのやり取りを担当しており、通訳のみならず、営業、秘書など多岐に渡る業務に就いている。

台湾の社会問題、アジア島嶼の社会課題に関心を持ち、原子力や放射能汚染や食の安全性、政治や選挙、軍事基地問題や慰安婦など、テーマはその時々社会課題を扱う勉強会やイベントに個人として参加し、沖縄をはじめとしてアジアの軍事基地に抗する市民との交流、その訪問の様子や、この社会で起こっている開発問題と、私たちの日常のつながり等を台湾の市民に伝えている。台湾国内、各地を始めとして、沖縄、韓国の活動家とのネットワークも幅広く持つ人物である。

### 3-2. 調査者依頼の経緯

研究当初より、沖縄から台湾に留学した経験を持つ筆者の友人から、Ipinさんを紹介頂いた。沖縄国際大学に2001～2002年に留学した経験を持ち、現在は台中在住で日本語を流ちょうに話す女性である。Ipinさんは自らの社会活動を語る時に「個人」、「組織を持たない」、「活動家ではない」と何度も語る。NGOの活動家でもなく、リーダーでもない一人の市民として何ができるのか常に考え行動する、そして学びたい・活動したい市民とのネットワークを築いてきた。また、定期的に海を越えて、沖縄、韓国・済州島や台湾・金門島<sup>vi</sup>を定期的に訪問し、座り込み活動をしている住民らとの交流を行っている人物である。

Ipinさんと筆者は、2018年の研究当初からの交流が続いている。筆者は研究および私的旅行を兼ねながら、年に3回ほど台湾を訪問し、その都度Ipinさんとお出合っては女性活動家を紹介して頂いた。時にはIpinさんと共に、イベントに参加したり、台湾女性のインタビューを兼ねながら活動場所を訪問したり、台湾の夜市を訪れながら互いの近況の話をする機会を重ねてきた。フォーマルな形でインタビューという形ではなく、時には雑談であったり、じっくり長時間対話を重ねる形をとってきた。また、Ipinさん自身も来沖する機会があり、筆者の所属する大学にて授業外にて学生との集い、「台湾における若者の選挙への参加」のお話を開いた。

若者の市民運動のうねりの中、誕生した蔡英文総統が当時の若者の社会運動の様子を記録している「新時代の台湾へ」(2016)の中で、「人々は党の指導に従い、政党の主張に賛同して街頭デモに参加するといった政党主導の社会運動モデルから、自ら情報を得て、自ら組織する独立・主体型のモデルへと転換していった」と語っている。筆者は沖縄と台湾を行き来するなか、社会運動に関わる約10名の若者と出会い、対話を行った。蔡氏のいう独立、主体的な意識を持つものが多いことは容易に理解できた。Ipinさんを始めとして、台湾で出会った活動する若者たちは強いカリスマ性を持たず、気さくで日本にも普通に存在するような彼ら、彼女らであり、対話を重ねる毎に、私のなかにある社会運動に関わる人物像に変化をもたらしてくれた。

一人ひとりの市民が集い、小さな車座で議論し合う対話の場が、社会の大きなうねりにつながっていくような台湾社会の様子が興味深い。筆者は、若者の応援者、彼女の言葉を借りると、社会運動をする若者たちにとって「隣のお姉さん」のIpinさんに出会い、彼女のライフストーリーを幾度となく聞かせて頂いた。彼女の歩んで来た道や、留学を含む主体的な移動、国内外の人々との出会いや価値観の変化と社会運動との関わりの中に学ぶべき視点があると捉えている。

### 3-3. 記録とインタビューについて

Ipinさんご自身が、社会的な活動そのものを日常的な延長上での学びや活動、暮らし方そのものを大切にしており、被調査者、調査者というかしまった関係性ではなく、Ipinさんの台湾での日常の暮らしを拝見しながら記録を別途とっていき形をとってきた。Ipinさん自身が一方的に話し続けたのではなく、筆者が本研究を通して、台湾の民主化の流れに影響を与える若者の意識が知りたいこと、台湾内外の人の移動がどのような影響をもたらすのか知りたい気持ちを持ち続けて接していた。Ipinさんから筆者には、沖縄または日本人としての意識や考えを聞かれたこともあり、お互いの経験していない事象やテーマであっても対話を重ね合い、関係構築につながってきたことが筆者にとっては貴重な時間であった。インタビューの形式が「テーマ・ライフストーリー (theme life-story) 法<sup>vi)</sup>」白水 [2016] により近いものであると捉え、また記録の方法に関しても、調査者が被調査者の対話を編集し、構

成し直していく「編集構成方式」白水 [2016] を参考に、研究を報告する。

## 4. Ipinさんのライフストーリー

Ipinさんのライフストーリー前半を「Ipinさんの家族」、「Ipinさんの幼少から学生時代へ」、後半を「Ipinさんの留学」、「Ipinさんの就労経験」、「Ipinさんの社会課題への取り組み・参加」という区切りで記録としてまとめている。

略号——は筆者、…はIpinさんの話した内容である。

### 4-1. 「Ipinさんの家族」

——Ipinさんのご両親はもともと台湾出身ですか。

…私たちの家族のアイデンティティはみんな台湾人であり、おじいちゃんも誰も自分を中国人とは呼ばない。曾曾祖父は、日本の統治時代 大正時代の前の、中国の明や清の時代に移民してきた。

私の父方、おじいちゃんのお父さんの代から、台湾の伝統的な寺があり、元々台湾ではなくて、曾曾祖父の時代に中国の福建省から渡ってきたもの。絵師としてお寺の壁の絵を描く仕事を、曾祖父、祖父の時代からずっと続いてきた。もしも、移民じゃなかったら、移民者の風習や仕事をしなかったかもしれない。移民の文化に関わる仕事をしており、関連性があると思う。

母方に関しては、母のお父さん、おじいちゃんも漢民族の移民。若い時から、台中から家族の男性たち何人かを連れて、台中の台東(タイトン)山の反対側を、新しい土地を開発することを生活の中でやっていた。その時代には、土地の殆どが山だけど、開発して畑になって登録したら、全部自分のものにできたようだ。お母さんも自分の父とは生まれてからもうずっと会ってなくて、おじいちゃんはずっと土地の開発、仕事みたいな感じで、家にはあまり帰ってこない暮らし方だったようだ。男性陣たちは移動しながら開墾者となり、女性、子ども、年寄りと一緒に助け合って生活していた。出稼ぎみたいだけど、出稼ぎではない形。新しい土地を手に入れるために、男性が移動して、何もいない場所、原住民しか住んでない場所で、こういう言い方はあまり良くないけど元々は山なので、漢人、漢民族が土地を奪いに行く、だんだん侵略するような感じだったと思う。母



側の家族は移民だからそこまで考えてなかっただろうけど、そうしないと畑にする土地をもらえないと考えていたと思う。家族は日本の植民地になるまで土地開発に関わっていた。

Ipinさん自身は、移民者である自身の家族の「土地を開墾し、移動し続けながら新たな仕事興し」と、彼女の生き方や、思想とのつながりは特に感じていないとしている。その一方で、自身の親の世代まで続いていた移動する生活から、台湾社会の工業化社会に伴う定住化生活を自然と行うようになったことによる「親は私に、外の社会を見てほしい」という願いは感じ取っている。

先祖から引き継ぐ、移民家族という歴史と意識、移動しながら自分の人生を切り拓く価値観は影響しているのではないかと筆者は思う。

#### 4-2. 「Ipinさんの幼少期から学生時代」

二人姉弟のIpinさんは3歳の頃に1歳の弟を連れて隣町まで歩いて家出をしては両親を驚かせるような子どもだった。特にジェンダーの役割を押し付けるような親ではなく、彼女の自立した精神を尊重しつつ、よく褒めてはやりたいことをやらせてくれるような環境の中で育っている。

—小さい頃は家庭の中でどのような育てられ方をしましたか。しつけや、ジェンダーの視点等は特別にあったのでしょうか。

…幼稚園に入った時、私が書いた絵とか字とかを、母がリビングの壁に飾り、近所の人に来るたびに必ず私の娘が描いたものを、天才でしょと言っていた。小さい頃はピアノや歌、オペラを勉強したりした。テコンドーではなく、普通の女の子がやることをやってきた。

親が私を連れて、おもちゃなどを買いに行く時、とても小さい時から、自分で選択させていた。恐らく幼稚園とか小学生の時からそうだった。部屋のカーテンとか、必ず私が選んだものを買う。それを鮮明に覚えている。1番最初に生まれた子で、みんなに愛されていて、何を要求しても周りに受け入れられると感じていたし、褒められた記憶が多い。

弟も可愛がられるとは思いますが、性格は私よりも静かだったし、私と弟、弟の方が大事だとかは感じ

て生きてこなかった。私たちの時代は外も家でも、男女の育て方としては平等だったと思う。

母と父が専門学校を卒業していて、母からは、自分がそんなに勉強してないから、あなたたちを教える能力はないと言っていた。でも、仕事をして必要な学費とか提供できるものは提供する感じだった。—学生時代の言語について教えてください。

…小学校では母語の台湾語は話せなかった。記憶では中学校では制限はされてなかったけど、みんなが母語でコミュニケーションをとるのはありえなかった。おじいちゃん、おばあちゃんとか年寄りとしか話さないし、学校とか外では北京語じゃないと、ダサイと思っていた。母語は田舎っぽいという、社会的な雰囲気やわざと国が作ったと思う。私は家でも話すし、台湾語はうまい方だと思う。戒厳令があった時までは、台湾語ではなく、北京語の番組しかなかった。民主進歩党が政権をとるようになってから、台湾語、原住民の言葉や、様々な言語の番組が出てきたのは、ここ10年以内のこと。

—台湾社会は10年前から言語を取り戻しているということでしょうか。

…私の感覚では、ここ10年で、私の親の世代は台湾語を禁止されていた。私が大学生の時は基本的に北京語だった。友達の中で台湾語が話せず、北京語しか話せない人がいる。次の世代、今の子どもの世代が初めて台湾語を重視している。

—1987年、戒厳令解除の時には小学校6年生くらいでしたが、記憶にありますか。

…1988年に520農民運動<sup>11</sup>があり、1989年に中国の六四（天安門）事件があった。当時私がまだ小学生で、テレビを見ただけで考え方に影響を受けなかったと思う。私の親が70年代の時の若者で、親達が20代の頃に台湾全島の主体意識が高くなったため（台湾が自立しないといけないという意識）、当時小学生の私がテレビで見た事件の内容をどのように教えてくれたことが重要だと思う。その時、私の親は特にコメントを話してなかったと覚えているが、喧嘩やデモ、血、人が死んだことを子どもが見たらだめとは言わず、新聞を自由に見せてくれた。

六四（天安門）事件はテレビを通して、遠い所で発生していても、初めて軍隊の弾圧を見て怖いと思っ

ことはとても印象的だった。家ではその事件のことをディスカッションすることはなかったが、無力感が流れていた。

六四（天安門）事件の時、学校では数日間連続、全員で黙祷した。当時の台湾教育ではまだ私達は中国人と教えており、中国でこういう悲しい事件があったと教えてくれた。台湾でも同様のことが起こるという気持ちではなく、小学生の私が、知っている限りの世界にいる他者が、こんなにも悲しいことにあったことに泣いていたと思う。

—Ipinさんの年代で女性が大学へ行くのは当たり前でしたか。

…当時も今も台湾では、勉強ができる子は絶対大学に行く。特に私が大学に入った以降、あとの世代は進学率が96%くらい。当時、台湾の教育部の10年改革があって、毎年教科書が変わり、学年の教えがバラバラで、同じ学年でも年代によっては教えられた内容が全く異なる時期だったと思う。成績が悪くても合格できるので、点数がなくても行ける大学もあったと思う。そういうことが何年間か続いて、恐らくここ5年位の間に、子どもの数も減ったこともあり、大学の倒産が出てきた。

—Ipinさんが通われた台中の、東海大学での学びを教えてください。

…台中の東海大学、日本語学科に進学した。幾つか選んだコースの中の一つが日本語だったので、そこに振り分けられた感じ。在学中の2000年頃から、大学の日本語学科の言語に対する方針転換が行われて、植民地支配の中で日本語が教えられた歴史の捉えなおし、「台湾における日本語は、日本の植民地時代の影響で強いられた国語としての言語、そして時代と共に経済的な利用としての日本語もある。日本語は目的ではなくただの手段である」という考えがあった。

私は日本語学科が方針を変更して最初の一年目の学生で、その頃はまだ実験段階だったと思う。また全ての先生が、こういう教え方ができる訳でもなかった。

印象に残っているのは、社会の授業と作文の授業だった。社会の授業は毎週違うテーマで、ディスカッションし、発表しあう形だった。その時に先生が私達に質問を与えてディスカッションをし、最後に、

特に結論がなかったこと。またディスカッションの時に先生はあまり意見を言わず、何かが正しいか、何か間違いかというのが狙いではなかった。

作文の授業では、グループを分けて活動をした。初めての作文の活動でクラスメートの故郷へ訪問することになった。20年前のその学生時代にクラスメートのお宅へお邪魔することになった。そのクラスメイトが優等生で、入学の時は私との席順が一個前の子だった。ニックネームで百ちゃんという男子学生、都会から来た子かと思っていたけど、故郷を実際に訪問したら、田舎だったので、人っているような面があるなあとと思った。台中から百ちゃんの家までバスで何回か乗りかえって、ようやく夕方までにたどり着いた。百ちゃんの家で夕食をした。百ちゃんのお祖様は昔広東から来た客家人で、家族との話は広東語に聞こえるけど、広東語とはまったく違う方言だった。広東語と客家語とはアクセントが似ているように聞こえるけど、通じなかった。

多人数でクラスメート10名位が百ちゃんの家遊びに行き、すぐ飲みすぎて、酔って、泣いていた。夜は男女区別無しで、みんなで雑魚寝した。翌日は近所を紹介してもらったくらいで、またすぐバスで台中に移動しないとけなくなった。帰って来たら、グループ単位で今回の訪問内容を記事にしました。私達もインタビューとは何かを知らなくて、まずは書いてみようという感じ。作文の先生は私達が書いた文書をチェックしてなかったこともまたびっくりだった。

言語学としての学びではなく、台湾の中にある社会問題について議論し、原住民族の暮らす地域にフィールドワークに行き、日本語で表現することを学んだ。正しい日本語を日本人のように使用できることを目標にするのではなく、日本語というツールを使い、社会課題を見て、聴いて、学んだことをまとめ、社会に向かっていくことが重視されたようだ。

#### 4-3. 「Ipinさんの留学」

3年生の時に、交換留学を決めて、4年生の時、2001年から1年弱、東海大学から沖縄国際大学に交換留学生として留学した。当時日本語学科だったIpinさんには選択する仕組みはなく、希望を出し、大学が決

める仕組みで留学先が決定している。

当時の日本は、海外からより多くの留学生を受け入れ始めており、2000年から毎年右肩上がりに留学生の数を増やしている [日本学生支援機構]。Ipinさんが2001年に日本に来日した際には、6.4千人強の留学生がおり、1位、中国 (約3.2万人)、2位、韓国 (約1.2万人)、3位、台湾 (約4千人) という順になっていた。しかし大半が、経済的な豊かさを求めて、表向き留学生でありながら、その裏で生活費や家族への仕送りの資金を得る手段としての留学だったようだ。Ipinさんの周りの留学生でも、日本語を真面目に学ぶことよりも、学外の居酒屋や体力使うアルバイト中心の生活をする留学生もおり、法律で定められた時間を超えて働き、過労で、授業に出席できない学生もいたことを覚えていると語っている。Ipinさん自身は学ぶ目的のための留学生を謳歌した時間だったようだ。

——行く前に、沖縄のことは知っていましたか。

…知ってけど、留学で初めて訪問した場所。祖母や、叔母、親せきが昔沖縄に家族旅行で行ったことがあって、台湾人から人気がある場所で、飛行時間が短く近いので、行ったことある人が多かった。

——留学生の時に感じたことや印象に残っていることはありますか。

…沖縄の学生Hさんに、「知り合ったら兄弟ですよ」という沖縄の言葉を教えてもらった。

——いちゃりばちよーでー (沖縄語：行きかえばみな、親せきになる)ね。それを実感したということですか。

…Hさんは、非常に親切で、何回か泊まったし、親戚の結婚式にも参加した。Hさんのお母さんは、琴の先生をやっていたので、沖縄の着物のファッションショーにも私を誘ってくれた。私も学生モデルの1人で舞台に出たりして楽しかった。

Sさんと彼女の親せきが掃除婦をしている関係で米軍基地に入ったりもした。その方が掃除を担当している米軍族の家族と一緒に食事したこともあった。

チューターや仲良くなった沖縄の学生の家に泊まりに行ったり、親切にされたりした。沖縄に滞在した1年弱の間は、学校がアレンジしたわけではないけど、いろんな出会いの中で、初めての経験も多かった。帰国の当日には、何故か友達が帰国の日を知っていて、20名以上の友人たちが空港まで見送りにき

ていてびっくりした。

——留学中に沖縄で感じた社会問題はありますか。

…2001年に留学した時に、少し学校側の知り合いの子たちと話したりして、どうして基地があるの、みたいな会話になった。その時、辺野古の座り込みとかは行ってなかったけど、米軍基地を多く抱える市町村に住んでいた友達もいて、基地の問題は沖縄にあること自体、良いことではないと感じていた。

基地のある町が、「昼間だと人が少ない」、「夜スナックばかり」とか「変な雰囲気危ないよ」と学生たちが言うことに、いろんな疑問があった。友達に、基地に対して「どう思うか」と聞いたら、「友達が米兵と付き合っているし、基地が長くあるから、米軍が沖縄人の生活の中に溶け込んでいる感じで普通だよ」と答えた。

私が台湾にいた頃、台湾に遊びに来ている外国人に対して反抗心があったかもしれない。外国人がバーに行って、台湾人女性が外国人男性のところでいちゃついたりするのが嫌だった。

沖縄の友達たち「そういうゆうことは好きですか、米兵と付き合うんですか、嫌な感じはしなかったか」と聞いたら、友達は、結構良いと答えていたけど、外国人の彼氏がいて、人から羨ましいと思われているかもしれないと思った。本当に具体的なことを教えてくれなかったので、楽しい恋愛生活をしているかどうか、わからないけど、へーっと疑問に思った。台湾で日本語学科だった頃も、学内の学生で自分の彼氏が外国人だったら、プライドが高くなる感じがあった。

沖縄の若者においても、イデオロギーとしての基地に対する反対意見と同時に、「英語習得」としての米軍基地およびその中で生きている人への憧れは存在している。英語を習得する手段として米軍を利用する、駐留している米軍および米軍族の活用に関しては社会問題の一つとして沖縄でも対立構造のもとになる。Ipinさんの語る「彼氏が外国人であつたらプライドが高くなる」という現象は、どの外国人でもよいというわけではないだろう。

Ipinさん自身も自分の日本語への憧れについては、「私のおじいちゃん、ひいおじいちゃん、お父さんの世代から日本語を使っていなくて、私の家族では日本語



を話している人間はいない。社会の低層の家庭だった、おじいちゃんも学校へ勉強できなかった子だった。私の父の世代でも、引越しばかりで、まともに学校へも行けなかった。家庭の影響がきつと多いでしょうが、私は日本語の環境で育てなかったため、日本や日本語に憧れてない」と語る。日本の台湾統治における日本語の導入後にも「強制される国語」という役割を終わった後でも台湾の中では、観光、経済の中で優位性のある第二言語として人気のある言語だと若者からよく聞く。台湾の台北を訪問するたびに、日本の大都市圏にいるような錯覚になるような、日本のサブカルチャーが溢れていることに驚かされる。筆者の感じている驚きにIpinさんは、「親日国台湾」と台湾および日本のマスコミや政府が流布し、あおっていることに警告を鳴らしている。流行は誰かによって作られており、その裏にある、企業の環境汚染や人権問題などの歴史や現状が見えにくくなるというのがIpinさんの主張だ。

また英語話者にあこがれを抱く沖縄の若者との比較の中で、どの言語を話す外国人でもよいのではなく、習得したい憧れの言語とその言語話者との連動の中で生じる「プライドの高さ」ではないかと筆者は感じている。沖縄での現象は、英語話者であるネイティブ米国人（米兵）と付き合うことが、「米兵は嫌な感じはしない、結構よい」と基地に付随している人への肯定から、米軍基地の肯定へ、若者の言葉を借りると「米軍基地のメリット」の概念につながりやすい。台湾の日本（語）人気および文化が社会へ広がっていくことに対するリテラシー力は重要だと思う。

——沖縄で基地の町に住んだ経験と、その後のIpinさんの社会的な課題に向き合うことに影響はありますか。  
 …はい、影響はある。留学の前、沖国で生活する前にそういう意識があった。沖国近くの社交街や売春街に住んでいた時、台中も米軍基地があったこと等、台中市内ですごい高級クラブがあったことと重なった。中学生の頃に塾は、まさに昔米軍のために運営していた繁華街の近くにあり、まだ数軒残っているけど、今でも繁華街のまま、昔の街はどんな感覚になるだろうと思ったことがある。日本の銀座みたいなかなと思ったりする。その頃はまだそこと戦争と結びつくことはなかった。

私が小さい頃、私のおばあちゃんの世代かな、貧

困の家庭は自分の娘を水商売に売ると聞いた。また、おばあちゃんもよく口にするけど、「娘は学校に行かずに、男の子のために仕事しに行きなさい」という考えを持っていた。おばあちゃんの話聞いた時、同じ人間なのに不公平な社会だなと思った。

Ipinさんが住んでいた沖縄国際大学のある宜野湾市は、2700KMの滑走路を持つ普天間飛行場が位置し、大学も米軍基地と隣り合わせて立地している。留学中も少なからず基地の影響を受けながら生活していた。その中で、IpinさんはM社校街や売春地域と揶揄されるような場所から遠くない場所に住み、昼間は閑散としており、夜になるとネオン街になるのを不思議な目で見っていたようだ。台湾の学生街といえば昼間も夜も学生らが街に繰り出し、屋台街ができるがそのような風景とは無縁で、昼間は道行く人と出会うことがなく、沖縄の学生からは夜にその社交街を歩くのは気を付けるように言われた経験も、幾度となくあったようだ。

その沖縄での体験と、Ipinさんが育ってきた台中で、米軍基地を受け入れている街の風景や雰囲気オーバラップしている。沖縄の中に基地があり、台湾にも同じまちの風景が存在する。その療法に滞在し、米軍基地を受け入れていく町の様子、受け入れる側が外からやってくるものに合わせて同じ景色を作っていく様子を目の当たりにしている。そのことは偶発的に起こるのではなく、同様な力関係が受け入れているものへの作用として働いていると筆者は考えている。

#### 4-4. 「Ipinさんの就労経験」

Ipinさんは沖縄からの帰国後、卒業申請を行い、その後就職活動を経て台湾の上場企業に勤めている。台湾では、在学中に就職活動を行わず、卒業後に就職活動を行うのが普通であるようだ。

日本語が話せることが一つの技術で、しばらくは中国や日本出張などかなり多忙な時間を過ごした経験を持つ。営業、電子部品取り扱い、パソコン関係、そして秘書等、様々な部署を経験している。

——桃園の会社ではどのような仕事をしていましたか。  
 …日本語を使う仕事で、社長室の秘書だから海外出張が多かった。20年前の中国は今とはずいぶん異なっており、ドライバーさんを事前に予約しないと、自

分で勝手に移動したりするのは不便な時代だった。中国の工業区は、もともと町ではないところで、工場が突然建設され、労働者を中国の各地から雇う形態だった。スマートフォンは当時なかったし、すぐに地図を調べたりとかもできなかった。

中国へ出張する時に、私の会社は私一人が派遣される形だった。遠い距離の移動をし、知り合いもいなかった。空港の通過の時に、止められて、後ろの小さい部屋に連れて行かれた。身の危険は何もなかったんですけどスーツケースの中はチェックされた。私は別に変な人には見えなかったはずだけど、独身女性だからわざと私物を見るのだろうかと思った。チェックする人は男性でしょ、部屋の中に男性1名と私だけしかいなかった。女性の警察がついてなくて、昔はそういったことが少し怖かった。日本の会社の取引先が工場を見る時は、中国出張に行き、夜は工業区、周辺はホテルとか高級クラブ、スナック、何店舗かのレストランとか食堂しかなかった。最初の頃はいろんな高級クラブにも同行した。営業マンで、会計は会社負担だったので、一緒に行きサインをすることをやらないといけなかった。最初の会社で総務とかアシスタントの仕事ではなくて、いろんな部署と担当をしたなか、深いとこまで見て学んでいる感じだった。

Ipinさんは、1998年、高校卒業と同時に台湾から中国へ短い期間、一人旅をしている。今まで使用してきた共通言語を持つ国、中国への訪問である。「同じ言語を話し、似たような顔をした人もいたのに、肌の色も、考え方も全く異なる人と国」と表現しているように、中国訪問は政治的に対峙する台湾と中国を身体で感じる実体験だっただろうし、台湾人としてのアイデンティティを強く認知する経験であったと言える。

Ipinさんの仕事は、「日本語」、「中国語」を共通語としながら、台湾、日本、中国の経済活動をつなぐために、これらの国々の移動しながら働くことが求められる。彼女自身は日本のバブル崩壊後、中国のバブル経済を経験しながら広がるグローバル経済活動のなか、政府間の政治的摩擦を肌で感じながら、企業および民間レベルでのやり取りを見続けており、それを仲介する役にもなっている。また、この約20年間の中国の成長および人々の生活の変化を実感している。

Ipinさんはよく、人々の日常の暮らしが大事であると表現している。また開発の課題に向き合う自身の存在を、「知らず知らずのうちに加害に加担してきた私」ともう一人の自分を語る。自分が社会の加害、被害の二項対立のどちらかではなく、どちらにも私自身の存在があることを自己批判的に捉えながら、社会運動に関わっている。

——Ipinさん自身の病気と、日本で起こった原発事故との関係性をどのように見えていますか。

…私は、3.11<sup>ix</sup>の前にバセドー病<sup>x</sup>を発覚し、治療している。いつ頃発症したかは不明で、私が病院に行った頃はもう既に1年、2年前から発症していたと医者に言われた。だけど3.11の原発事故の後にもまだ日本の事故現場から放射線が放出し続けている情報を手に入れられないまま、3.11の後にも東京へのお出張は通常通りに行っていた。

東日本へ行き続けることで、バセドー病が酷くなるかどうかはわからないけど、仕事の疲れやストレスで、なかなか症状がよくなるため、2012年の7月に台中へ戻った。台中の実家で骨が変形したお魚を食べたこともあった。何故か3.11の後に日本製品の抹茶のブームが起きて、コンビニに日本製品がどんどん増えて来たところだった。台湾は元々すごい日本輸入品が多いし、検査基準も緩いため、台湾国内で一時期日本輸入品をストップすべきというデモ<sup>xi</sup>があった。特に粉ミルクの輸入に対して、母親たちの運動は多かった。私は食生活ではできるだけ日本製品を避けてきた。事実を知った後は、東日本以外、西日本と九州と沖縄は相変わらず行ったり来たりした。何年になった時かははっきり覚えていないけど、恐らく生産地を全部「日本・国内産」にした頃、東北で汚染されているものは日本の他の産地の物ともう混ぜられていたと思った。

近年の台湾では、日本よりも反原発運動が活発で、「台湾では日本の原発運動に連動し、通称『核四』、第四原発の建設中止を求める運動が行われてきた経緯」[港2014]がある。2011年東日本大震災以降、その運動が子どもをもつ女性、若者らによって加速し、市民らの10万人規模のデモが開催されている。その後、政府がその要求を反映させるため2018年国民投票への



採択、多数で可決され、2025年までに原発廃炉を決定している。2014年の「ひまわり学生運動」<sup>21</sup>に影響を与えていると言われている。Ipinさんも社会的なうねりの中、何度も勉強会に参加し、政府や企業が流さない情報を主体的に集め、日本の福島からの被災者かつ、避難者に出会っている。その頃から、脱原発運動および、食の安全、有機農法等興味関心を持つと同時に、日本政府や日本企業および台湾政府の、日本食は安全であるという情報と情報操作に対して警戒を鳴らしている。

#### 4-5. 「Ipinさんの社会課題への取り組み・参加」

—普通的女子学生だったのが、社会的な活動をするようになったのですか。

…大学生当時、社会的な活動に接したことはあっても、座り込みとか現場に行くのは、やはり卒業後だった。今はっきり覚えてないけど、何かのきっかけで台中にいた時に、毎週水曜や金曜の夜に集まるとか、全ての団体の集まりに参加してきた。大学を卒業して、社会のことが見えてきていたし、誰かの主張を理解するだけではなく、台中市民として、台中の他のNGOや、台中に関心のある人が、何を考えているのか興味を持ち、みんなが何をディスカッションしているか知りたかった。

—テーマは決まっているのでしょうか。

…私たちは団体といっても個人に近い。個人で活動している感じ。1人の個人で「Me Too」<sup>22</sup>やっている人も基地反対やっている人もいる。1つだけにずっと集中するんじゃなくて、基地反対に行くとしたら、みんなに声かけて一緒に行きませんか、1人だと力が足りないからと誘う。

—原発も基地も知れば知るほど厳しい、現地で苦しくなったりしませんか。

…苦しくはならない。沖縄の米軍基地のことを初めてやった時に、台湾で人が集まるかどうかもわからずにやった。何人かの仲間たちが、世界でこういうことが起こっているよと、本当に純粋に、深く考えずに活動に入ったと思う。沖縄の現地を訪問してみて、基地反対運動を、20年以上やっていたことをその時に初めて知った。留学している時も知らなかった。

—勉強会を通じて、一人ひとりが学びたいことで集い、学びを超えてアクションに繋げていくというプ

ロセスや気持ちについて教えてください。

…それぞれの意識を聞いたことはないし、皆、違っているとは思いますが、学びから絶対にアクションへという形でもない。台湾の社会運動者は、個人の意識でいつも動くことが多いと思う。

「怖いけど、一人じゃないから行ってみたい」ではなく、「とにかく時間が合えば、行って見てみよう(遊び気分もあり)」という人が多いかもしれない。

でも、平和キャンプに誘う主催者の雰囲気非常に大切かと私は思う。何人かの友人をこれまで紹介したけど、私は基本的に近所のお姉さんみたいな感じで、激烈な社会運動者や学者ではなく、怖い雰囲気や厳しいとか難しい話題を話さない人間と思われることを心がけている。

それから、「現場でデモをしている人達は私達のような一般市民です。デモが怖いと思っているかもしれないけど、日常生活を想像してください」とまず伝える。私は、あくまでも私が思ったことを伝え、特に人を説得しようとしません。

例えば、名護市辺野古埋め立て反対のデモ現場で知り合ったYさんが台湾に来た時は、Yさんが歌を歌いたかったら、歌でその思いをみんなさんに伝える。デモ現場のドキュメンタリーを見て、人に感じてもらうとか、それ以上の話はあまりしない。デモをしても無意味だと思う人もいたかもしれない。その否定的な気持ちも私は受け止めたと思っている。

私はそんなにお喋りが好きな人間ではなさそうですが、心の開放感を持つようにしている。座り込み現場にいた住民の方々に対しても、台湾から一緒に行った参加者に対しても、いつも一緒にいるだけ。相手を信用して、安定的な雰囲気を与えることをするように、話をする時は穏やかで、変に緊張したりとか、テンションを高くしないようにしている。

今回の出会いが、どなたの何かのきっかけになるかは分からないけど、いつか何かのアクションに繋がるという信念を私は持っている。

台湾の若者の社会運動の記録は、文章および映像共に数多く存在している。特に2014年の立法院選挙の「ひまわり学生運動」は、規模は主催者発表で50万人、警察発表では11万6000人であり、世界中にその様子が発信されていたため、記憶に残っている人も多いだろう。

台湾の学生運動の象徴として扱われているが、そこに参加し、または支えている台湾の若者の様子がずっと知りたいと思っていた。筆者が調査したIpinさん自身は当時、既に社会人として働いており、中心の人物でもなかった。しかし、「ひまわり学生運動」だけが象徴ではなく、そこに向かっていく時の人々の意識や台湾の民主化運動の様子を知らなければ、表面的な理解でしかないことをIpinさんを通じて学んだ。

Ipinさんは、台湾を超えて、沖縄や韓国、台湾の中の島（金門島）での軍事基地に抗す人々と共に過ごす平和キャンプに参加してきている。一人で行くのではなく、SNSや勉強会を活用し参加者を募って現地を訪れることを重視している。軍事基地への反対運動場所では激しい戦いをイメージする人が多いが、その中心には「普通の人、おじー、おばーが座り込む」だけと言う。時に彼女は座り込む人々の日本語通訳者になりながらも、寄り添うことが最も大事だと認識している。「無理には話さない、話したい人が話せばよい、歌い人が歌えばよい」というのが大事だと。その場所の空気を共に吸い、抵抗する人々と共に時間を過ごす抵抗の姿勢だ。国境を越えても、抵抗する現場での「非暴力の姿勢」、「抵抗する人々との自然な対話」を実践している。

活動の範囲を国境を越えて、韓国、沖縄、金門や香港まで多岐に渡っているのか疑問が湧いてくる。しかし、Ipinさんの聞き取りを通して、入ってくる社会の情報に国境はないのだろう。軍事、食の安全、原発問題等、どれをとっても、台湾国内だけの問題ではなく、加速するグローバリゼーションのなか、互いにつながり合う中で生まれている問題だ。それぞれの問題に線を引かずに、国境を越えても存在する同様の社会問題の本質に迫り、そして市民として何ができるのか考えている。時に人とネットワークを通じて参加する座り込み、デモ、集会、様々なアクションがある。しかしアクションありきではないと語る。現地を訪問し、他者との対話の中で向き合う。それを台湾に持ち帰り、また勉強会で市民に伝えていく、別のテーマの活動にも広がっていく。ハチドリの雫を運ぶ行為にも似ていると筆者は感じた。

## 5. まとめ

Ipinさんの語りを5つに区分した。1)「Ipinさん

の家族」、2)「Ipinさんの幼少から学生時代へ」、3)「Ipinさんの留学」、4)「Ipinさんの就労経験」、5)「Ipinさんの社会課題への取組み・参加」である。それぞれの区分のなかで、社会運動とどのようにつながっていくのだろうか筆者によりまとめた。

1)「Ipinさんの家族」より、家族の歴史をたどると、中国大陆から台湾に移住した経験を持つ。その後、移住し続ける形態から定住へと変化をしてはいるが、移動すること、外へ外へと意識を広げていながら生きていく姿勢は、Ipinさんの家族の歴史につながっているものと思われる。また、曾曾祖父から父親の時代まで、中国文化に付随するお寺の絵師としての仕事であり、母方は土地を開墾することで農地を獲得してきた開墾移民者である。よそ者としての存在であり、他民族の意識だった曾曾曾父母の時代から、「台湾人」という確固たるアイデンティティを持つIpinさんまで、4世代の歴史がある。その間に家族が移住する形態から定住化する暮らし、そして開拓者から工業化を支える働き方に変化している。

台湾の歴史や開発は、他所のものによる参画が大きな影響をもたらしている。Ipinさん自身は、家族の歴史を見つめており、開発者として台湾に何らかの影響をもたらしたことを認識し、時には自己批判的に自身の家族の歴史から現在の暮らしまでを捉えている。

2)「Ipinさんの幼少から学生時代へ」

1987年、戒厳令を小学6年生で経験しているIpinさんにとっては、民主化される前後の台湾の中で暮らしている。家庭においては、ジェンダー規範に捕らわれず、自尊感情が高くなるような親の関わりをのなか、十分に愛されて育ったことを自認している。

言語も、家では台湾語、外では北京語を話す生活様式から、台湾アイデンティティの高まりと共に台湾語を取り戻すことも経験している。

台湾の民主化が起こるなか、教育改革の真っただ中で学生時代を送っている。Ipinさんが大学生になった頃には男女共に学び合い、高学歴化が進み、大学全入学時代を迎えている。高校あたりから社会問題を活発に議論する経験をし、東海大学の日本語学科入学後には「日本語」そのものを台

湾の歴史における植民者による強制された言語であることも踏まえ、批判的思考を併せて学びながら、台湾の原住民族の暮らしや社会課題をフィールドワークを通じて学び、「日本語」を使って発信している。

### 3) 「Ipinさんの留学」

交換留学生として、日本（沖縄）の沖縄国際大学で約1年間学んでいる。日本が留学生を積極的に海外から受け入れ体制を整えた頃であり、同時期に留学しているアジアを中心とする他国の学生とも出会っている。Ipinさんは大学の学びと共に、沖縄の同世代の友人やその家族との出会い、いわゆる普通の暮らしや、沖縄の人々との温かな関係性をそこで築き、現在でもつながり続けている。

さらに基地の町で暮らした経験を考えて行くきっかけにもつながっていると語る。台湾のなかにもある基地の町の風景と、沖縄の風景が同じであり、そこにある影の部分を意識する。また、若者自身が生まれた時から当たり前になる基地と共にある暮らし、憧れの言語としての英語があり、時には恋人の存在につながる米兵の姿を目の当たりにしている。地元学生とのやり取りの中で「基地を抱える町と人々への影響」を多面的に学んだだろう。

### 4) 「Ipinさんの就労経験」

グローバル化する時代、中国経済の発展とアジアのグローバル化が連動していくなかで、「日本語」を話すIpinさんは、台湾を中心として、中国、日本のビジネスを結ぶ橋渡しを行っており、現在もそれを活かしながら働いている。

2002年に就職、中国の監視社会と、広大な土地に突如現れる工場地帯の仕組みの中で、日本人の案内・通訳・営業等を経験し、深いところを見ていたと当時を振り返る。その後、自身のバセドー病を発病し、2011年の東日本大震災と原発放射能汚染を日本と台湾を行き来しながら、日本はもとより台湾政府も安全神話に少なからず不安を感じ、各国の企業や政府の情報操作を注意深い視点で見えるようになった。

### 5) 「Ipinさんの社会課題への取り組み・参加」

バセドー発病による「食」「原発と放射能汚染」への関心を持ち、自身の過ごした町や留学するな

かで基地のある町で過ごし、そこからつながる沖縄、韓国の済州島、台湾の金門島に存在する「基地反対運動」に関わるようになった。リーダーや活動家ではなく、「個人」としての重要性をあげ、一人ひとりの自由な参加が、社会を変える大事な要素になっていることを信念としている。日常生活の中の社会問題、加害、被害という関係性が見えにくく、時にその立場が逆転することを意識しながら、組織に属さず、社会問題に向き合う若者との緩やかなネットワークを築く活動であり、誰もが参加しやすい活動と「非暴力主義」を大事にしている。台湾の中で継続的に学び合いながら、韓国、沖縄の基地に抗する人々との対話を重ねている。

Ipinさん一人のライフストーリーから若者の社会運動をどう捉えるのかである。中国大陆からの移民家族の中で家族は定住化し、台湾人としてのアイデンティティが出来上がっている。広く外を見て欲しいという両親の思いがあり、一人旅や留学も家族の無意識な後押しもあるだろう。彼女が3か国を移動する時代背景は、中国の経済的発展が著しく、日本、台湾もその影響を強く受けている時期である。その中で「日本語」という言語を用いながらそれぞれの社会構造、政府の情報操作や発信を敏感に感じ取っている。

台湾の民主化の波が日本と比較しても、加速度的にやってくる中で民主化を鵜呑みにしない市民、特に若者たちの存在の一人としてのIpinさんの存在であると筆者は捉えている。感じ取る力、批判するリテラシー力は、台湾の教育体制そのものが、批判的な思考力を身に着けることを重視したこと、台湾の大学で学んだフィールドワークであり、表現する過程で得た力であると言えよう。若者のデモを行う風景、立法院を占拠する風景を見ると社会的影響のある大きな一枚の風景画として映るが、しかしそれに参加するのは一人ひとりの人間である。Ipinさんの活動そのものは、ハチドリの一羽のようであるが、社会運動そのものをたどるとハチドリが運ぶ一滴の雫である。

筆者の問題意識が「日本（沖縄）の中で、社会課題に向き合う若者、特に大学生の姿勢をどのように教育していくのか」ということであるが、Ipinさんのライフストーリーから学んだこと、教育者である筆者自身



もやはりハチドリの子を運ぶ、地道な関わりや姿勢を若者と共に大事にしていきたいと思う。

## 謝 辞

本研究にずっと関わり続け、度重なる問い合わせに答えて下さったIpinさんに感謝申し上げます。また、Ipinさんを経由し、お話しを聞かせて頂きました台湾の10名の活動家の皆さんにも併せて感謝申し上げます。皆様の暮らしの延長線上にある活動が、よりよい社会につながっていることを学びました。筆者自身、若者と共に社会の開発課題に向き合う方法、考え方、それを教育の中でどのように展開するのか、教育者の在り方を考えさせられました。これからも台湾と、沖縄を行き来しながら、市民主体の交流を期待しております。

## 引用文献

(Web一覧)

- 外務省,「台湾基礎データ」, <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/taiwan/data.html>, (2020.9.10)
- 台湾駐日経済文化代表処, 台湾ニュース, [https://roc-taiwan.org/jp\\_ja/post/61347.html](https://roc-taiwan.org/jp_ja/post/61347.html), (2020.9.2)
- 日本学生支援機構, 日本人学生留学状況調査, <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/nippon/index.html>, (2020.9.2)
- 川口隆行,「文学研究あるいは言葉の教育と『地域研究』」, [https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/2/26227/20141016153649986994/AjiaShakaiBunka-Kenkyu\\_10\\_40.html](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/2/26227/20141016153649986994/AjiaShakaiBunka-Kenkyu_10_40.html), (2020.9.10)
- 国際連合広報センター,「国際移民の総数は、引き続き世界人口を上回るペースで増加」, [https://www.unic.or.jp/news\\_press/info/34768/](https://www.unic.or.jp/news_press/info/34768/), (2020.9.2)
- 文部科学省,「留学生30万人計画」骨子の策定について, [https://www.mext.go.jp/a\\_menu/koutou/ryugaku/1420758.html](https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/1420758.html), (2020.9.10)
- 一般社団法人 全国日本語学校連合会,「なぜ、台湾で『ひまわり学生運動』が起きたのか」, <http://www.jalsa.jp/kiji/2-1.pdf>, (2020.9.2)
- Tabi-on,3. 半路珈琲 Halfway Cafe, [https://tabi-on.com/feature\\_underculture\\_1](https://tabi-on.com/feature_underculture_1), (2020.9.2).
- The Asahi Sinbun Global+,「外国人労働者受け入

れ、台湾に学ぶ 都会生活に満足、スキルアップも」, <https://globe.asahi.com/article/11542753>, (2020.9.5)

The Asahi Sinbun Global+,「かつて中国をにらんだ台湾の離島・金門島 今や暮らしは中国頼み」, <https://globe.asahi.com/article/11773215>, (2020.9.5)

The liberty book マスコミが言わない次の日本,「台湾は原発再稼働に舵を切った日本を見習うべき」, <https://the-liberty.com/article/7763/>, (2020.10.3)

<https://www.nippon.com/ja/currents/d00128/>  
若林 正丈,nippon.com,「揺れ動く台湾市民社会—『ヒマワリ運動』が浮上させた『多数』の意味」(2020.10.3)

(文献一覧)

- Russell King(2010) The Atlas of HUMAN MIGRATION 竹沢、稲葉、高畑(訳)(2012) 移住・移民の世界地図 丸善出版 11頁
- 蔡英文『蔡英文新時代の台湾へ』前原志保(監訳)(2016) 白水社
- 渡辺博史『台湾女性史入門』(2008) 人文書院
- 港千尋『革命のつくり方』(2014) インスクリプト
- 毛受敏浩『自治体が開く移民政策—人口減少時代の多文化共生への挑戦—』(2016) 明石書店
- 若林正丈ほか『台湾百科・第二版』大修館書店 (1994)

## 註

<sup>i</sup> 「主體的」というと、自発的な意識が大きいと思われるが、現在の人の移動では、様々な要因で住みたい場所を追われてしまう強制的な「人の移動」も存在しており、その移動を主体とするかどうかの検証をおこなっていないため、本稿では、自らの自発的な意識における移動に留めておきたい。

<sup>ii</sup> 第14代中華民国(台湾) 総統。1956年8月31日、台北市生まれ。法律学者から政治家に転身し、民主進歩党主席として総統選に臨んだ。2度目の2016年総統選で他候補に大差をつけて勝利し、同年5月に総統に就任した。女性の総統は台湾史上初。

<sup>iii</sup> 台湾に拠点を移した国民党政権は、台湾統治にあたって戒厳令を施行。台湾での一党独裁政治の始ま

りであり、1987年までの38年間続いた。思想が統制され、新政党の結成の禁止、人々の人権や言論の自由は無いに等しいものであった。

<sup>iv</sup>2016年1月には外国人労働者は約67万人、同時期の日本の受入れ者は128万人であるが、台湾の総人口が日本の5分の1であることを考えるとその数の多さは日本以上である。

<sup>v</sup>台湾概要(外務省、2020)：3万6千平方キロメートル(九州よりやや小さい)、約2,360万人(2020年2月)、主要都市は台北、台中、高雄。1971年に国連から脱退し、国交のある国は15か国。日本とは正式な国交は存在していないが、人的交流および経済交流は非常に盛んである。2019年人的往来に関しては、日本からの訪台者数約217万人(台湾交通部観光局)、台湾からの訪日者数約489万人(JNTO)。

<sup>vi</sup>中国南東部、福建省アモイ市のすぐ沖合の島である。中国大陸から10キロも離れておらず、台湾本島からは200キロも距離がある。1949年の中台分裂で国民党政権が台湾に逃れた後、台湾側が島を実効支配しており、中国と向き合う最前線の離島だ。台湾軍も駐留しており、台湾からは松山空港から定期便が飛んでいる。

<sup>vii</sup>調査者の側に話者から聞きたいテーマが比較的明確にある場合の研究法である。話者主導による語りを聞きつつ、調査者のテーマに関わる点も語ってもらうというやり方。

<sup>viii</sup>台湾、戒厳令後に起こった最大規模の大衆運動。農民の権利および農作物の適正な処遇を巡って国家と市民が衝突する運動であり、多くの死傷者も生んだ。

<sup>ix</sup>東日本大震災は、2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による災害およびこれに伴う福島第一原子力発電所事故による災害である。

<sup>x</sup>バセドウ病またはバセドー病(独: Basedow-Krankheit)とは、甲状腺疾患のひとつで、甲状腺機能亢進症を起こす代表的な病気である。チェルノブイリ原発事故以来、原発放射能漏れによる、甲状腺の病気との関連性を指摘する社会運動が増えている。

<sup>xi</sup>2011年の東日本大震災での福島第一原発事故以来、台湾でも、脱原発の市民運動が再燃している。10万人規模(主催者発表)の脱原発デモが行われた。

<sup>xii</sup>2014年台湾で起こった学生運動。与党国民党が中国との「サービス貿易協定」(2013年6月調印)を立法

院(一院制国会に相当)の内政委員会で審議終了・本会議送付を強行した。これをきっかけに、抗議する学生が立法院本会議場に突入、議場占拠を続、18日間の議場突入・占拠の行動は急速に支持を集めた。占拠直後から立法院周辺の街頭は支持者の座り込みで埋まり、議場内外の連絡と補給、その主張の台湾内外への発信などの態勢が、文字通りアツという間に整えられ、一つのうねりとなった。数日後には「ヒマワリ(学生)運動」と通称されるようになり、さらに3月30日、総統府前に、警察発表11万人、主催者発表50万人の抗議集会を開催するまでの広がりを見せた。[若林]

<sup>xiii</sup>「私も。」を意味する#MeTooは、今まで沈黙されてきた問題を多くの人が公表することで、世の中を変えていこうとする動きであり、その沈黙されてきた問題とは、性的被害である。この問題に目を向けてもらおうと、セクハラや性的暴行を受けてきた人たちがSNSを利用して被害を告白したり、啓発を広げる運動。2017年、米国を発信地として世界中に広がった運動。

付録

台湾の社会的出来事、Ipinさんの生活史年表

年	社会の出来事	Ipinさんの生活史
1945	第2次世界大戦終了、日本降伏。台湾、中華民国に復帰。台湾省行政長官として陳儀が赴任。	
1948	蒋介石、第1期総統に就任。	
1949	大陸で中華人民共和国成立。戒厳令を実施	
1971	キッシンジャー訪中。中国、国連に復帰。台湾、国連を脱退。	
1978	蔣経国、第6期総統に当選	
1979	台米国交断絶、中米国交正常化 美麗島事件	台中にIpinさん、台中に生まれる
1982		Ipinさん、3歳、弟と二人だけで、隣町に歩いて初めての旅に出る
1984	「台湾原住民権利促進会」が結成	
1986	民主進歩党結成	
1987	38年続いた戒厳令の解除 台湾原住民民族権利宣言	
1988	蔣経国死去、李登輝が総統に昇格 529農民運動	529農民運動、野菜と卵を投げていたおじちゃん・おばちゃんのデモを見た
1989	六四天安門事件（中国本土） 中華人民共和国・北京市、天安門広場に民主化を求めたデモ隊に、軍隊が武力行使し、多数の死傷者が出る	六四天安門事件、テレビを通してショックを受けたこともあり、初めて軍隊での弾圧を見たと思いが、軍隊の前に人が逃げなかったことを覚えている
1990	ワイルド・リリー運動。台湾移転後最大の学生運動であり台湾の民主化にも大きな影響を与えたといわれている	
1991	第1期国会議員全員退職	
1996	初の直接総統選挙で李登輝が当選 行政院原住民委員会として発足 2002年に、原住民族委員会と名称変更	
1998		高校卒業と共に。中国大陸へ初めて一人旅に出る
2001		東海大学から、沖縄県の、沖縄国際大学へ1年間の交換留学生として派遣される
2002		沖縄から台湾へ帰国、大学卒業。日本語を活用できる桃園にある企業へ就職する
2003	中華圏としては初となるプライド・パレード「台湾同志遊行」が台北で開催	日本・中国・台湾を仕事を通して年に3・4回出張に行き続ける（～2011年まで続く）
2008	野草莓学運（野莓学生運動）が国民党の馬英九主席が圧勝に対し、急激な傾中路線を危惧する学生や市民が台湾の中華民国旗を掲げて抗議デモの実施	
2011	日本の福島第一原発で放射能漏れ事故を受け、台湾首都の台北市で四基目新規の原子力発電所の増設に反対及び現存する原発の総点検を求めるデモ開催	
2012	旺旺グループのメディア企業買収に対して起こったメディア独占への反対が若者の運動に広がった	・桃園から、台中に甲状腺の治療のために戻る ・福島から避難して来た家族 <sup>1</sup> と出会う



年	社会の出来事	Ipinさんの生活史
2013		<ul style="list-style-type: none"> <li>・スタディーツアーで初めて沖縄の米軍基地反対運動で、辺野古テント村で住民と共に座り込む</li> <li>・「南コリア済州島海軍基地と沖縄・台湾」という交流会を行った</li> </ul>
2014	ひまわり学生運動（318学運）。台湾の立法院に対して行われた抗議デモ運動。総統府前に、警察発表11万人、主催者発表50万人の抗議集会を開催	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海南島戦時性暴力被害者への謝罪と賠償を求めるネットワーク(Hainan NET)の常設展示、ドキュメンタリー会開催。</li> <li>・「318ひまわり運動」へ参加</li> </ul>
2015	LGBTパレード、メディアや政治の関心の高まり、約7万8千人が参加	「映画祭」—三つの島の映像を見る—を行い、台中文化中心の会議室を借りてシンポジウム（「蠱惑の仮面：台湾・済州・沖縄、分断に抗して」）を行った
2016	蔡英文総統として初当選。台湾史上初の女性として選出される。	高雄と台東「平和の島連帯、平和キャンプ」参加
2018	地方統一選挙に合わせて10項目の「国民投票」も実施	韓国・済州島、カンジョン村 <sup>2</sup> 、平和キャンプ参加
2019	同性婚が合法化される	台湾の金門島、平和キャンプ参加
2020	蔡英文総統再選 総統選挙のために海外にいる留学生が帰国し投票を行う。 「台湾人の大移動」の日となる	

出典：若林正文(1994)ほか『台湾百科・第二版』(大修館書店、1994年第2版)、Ipinさんインタビューをもとに、筆者作成

<sup>1</sup> 東日本大震災の中で発生した福島原発事故による避難者家族

<sup>2</sup> 済州島の南部に位置する人口1800人ほどの村。2007年に南コリア海軍が軍港(軍民共用と謳ってはいるが)建設の予定に地であり、村民はそれ以来、ずっと反対運動を続けている。

# The Life Story of Taiwanese Women (Ipin Chen): From the Social Movement in Taiwan to Solidarity in East Asia

Naomi Tamashiro

## Abstract

The objective of this paper is to examine the experiences and perspectives of a Taiwanese woman, Ipin Chen in her work with social movements through her narrative. She is from Taiwan and studied in Okinawa, Japan.

Growing up in the 1980s in the midst of Taiwan's democratization movement, she spent 2001 at a university in Okinawa as an exchange student. After she finished her study in Okinawa, she returned to Taiwan, where she worked at a Taiwanese company as a Japanese-speaker, working with Japanese partners and going back and forth between Japan and Taiwan. While working at the company, she has been working on her life's work that involves activities related to social development issues.

After studying in Okinawa, she started to see the correlation between her way of living and social issues more frequently, especially the ones in East Asia and to consider them as her own issues that need to be addressed as well. Since then, she visits many sites where there are social issues together with her friends, and continues to exchange and build relationships with those communities. Through her experiences and stories, where we can see her unique relationships and connections with East Asian activists, this paper also summarizes the movements of young people who are actively participating in the democratic movement in Taiwan.

**Keywords:** Taiwanese woman, study abroad, Social Movements and Youth, Life story, Taiwan and Okinawa,